

原発被災者支援報告書

2022年1月31日 Café de FUKUSHIMA 石川和宏

*報告期間1月17日(月)～22日(土) (2022年第1次)

【1】結果の概要

今回は、「コロナ」と「雪」に左右された月となりました。これだけスケジュールに影響があったのは初めてのことです。気温は、明け方が-3℃、日中は+3℃で、寒い日が続きました。

福島県の新型コロナ感染者は、1月5日(13名)から激増し(前日4日は2名)、直近29日では、440人になりました。県の対策は、19日に南相馬市限定で「南相馬市における新型コロナウイルス感染症集中対策」が発令されました。その後、まん延防止重点措置が、南相馬市などから始まり、数日の内に県内全域対象になりました。期間は2月20日まで。コロナ感染者は、連日過去最多を更新しています(1月29日発表)。

*1月の支援

◇18日(火)南相馬市原町区上町復興住宅

ここだけ予定通りでした。当日朝は、車の雪かきからスタートでした。

◇19日(水)南相馬市原町区「まごころサロン」イベント開催 カリタス南相馬に支援物資お届け
元々この日は準備の日でしたが、予定を変更して皆さんにお会いできました。

◇20日(木)川内村社会福祉協議会 五社の杜サポートセンター NPO 法人昭和横丁 西町災害公営住宅(南相馬市鹿島区)。

この日は、南相馬市飯館村同窓会の予定でしたが、会場(南相馬市の施設)がコロナで閉鎖になり、急遽中止。代わりに訪問・近況伺いと支援物資のお届けをしました。

◇21日(金)福島市「あつまっぺ交流館」

福島市に避難している浪江町民の集い。

開会直前まで準備をしましたが、積雪と当日朝の降雪で皆さんが集まれませんでした。

*1月に出会った被災者・避難者:29名、総参加者37名

*2015年1月集計開始からの累計:428ヶ所 被災者・避難者9,684名、参加者総数10,819名

【2】1月18日 南相馬市上町復興住宅

南相馬市原町区の市街地で、夜の森公園の西側。原ノ町駅からも徒歩圏。3、4階建て復興住宅が7棟・182戸あるが、居住は150戸程度。前回開催は、2020年10月。

浪江町・飯館村・南相馬市小高区などの避難者が入居しているが、内訳などは(個人情報なので)分からないとのこと。自治会は未だ組織されておらず、管理人会に鍵の開閉・暖房などお世話していただいた。新しく代表管理人になった佐藤さん(以前からの知り合い)に、チラシ・ポスターから鍵の開閉までとても親切にお世話をしていただいた。佐藤さんは、「復興住宅住民同士の繋がりが不可欠」と、イベント(開催)の大切さを語っておられた。

復興住宅での新たなコミュニティは、地域のセーフティーネットワークを担う復興の要で、欠かせない。

支援の結果

- ・支援者を除く参加者 11 名 (内男性3名) 総参加者 15 名
- ・支援者は、カイク加藤さん(ゴスペルタレント企画・マジック)・加藤幸子さん(同・腹話術)・石川和宏・石川千鶴子
- ・提供したのは、マジック・腹話術・お誕生会・ビデオ昭和のお笑い名人芸「なんでかフラメンコ(塚すすむ)」・ビンゴゲーム・脳トレクイズ・飲み物(自家焙煎コーヒー・お茶)・手作りケーキ・お菓子。温もり届け隊の編み物(クッション・靴下など)は、順番を決めて皆さんに選んで頂いた。(写真)

皆様に伺ったこと(アンケートの回答から抜粋)

- ・家に帰りたいけど帰れない。
- ・早く飯館に帰りたい。
- ・自宅へ帰りたい。
- ・時々子供に会いたい
- ・仮設住宅の方が繋がりがあった。
- ・会話の相手がいない。
- ・毎月 1 回くらい皆さんに会いたい。
- ・心の病になっているような状態なので、何回も来てください。



【3】1月19日南相馬市原町区「まごころサロン」

Café de FUKUSHIMA は、真ごころサロンの皆さんと2015年9月以来のお付き合いである。当時は、南相馬市寺内第1仮設住宅(40戸)にお住まいで、小高区の方が多い。小高区は全域が避難指示区域(避難指示解除準備区域)だった。この仮説には、NPO法人「真ごころ」がサロンを常設していた。

急な依頼をしたが、予定を空けてイベントを開催させて頂いた。7回目。前回は去年11月。皆さんに大歓迎して頂いた。

会場のカリタス南相馬は、地域の生活困窮者支援もしている。物資をお届けした。

- ・支援者を除く参加者18名(内男性3名) 総参加者19名
- ・支援者は、石川和宏
- ・提供したのは、ビデオ昭和のお笑い名人芸「なんでかフラメンコ(堺すすむ)」・ビンゴゲーム・脳トレクイズ・飲み物(自家焙煎コーヒー・お茶)・手作りケーキ・お菓子。



【4】まとめ

南相馬市のコロナ 病床使用率は66.7%(20日現在)地域の医療提供体制が逼迫。病院でもクラスターが発生。今回お会いした中に「病院で診察を断られた」という方もいました。選挙運動中の南相馬市長も感染。福島県の「まん延防止等重点措置」は、当初南相馬市といわき市の2市が対象でした。その後対象範囲は県内全域になりました。あつと言う間の感染拡大です。南相馬市は、今回が初めてです。

「支援の支援」名古屋岩の上教会(手作りケーキ)、温もり届け隊(編み物)を始め、たくさんの個人の方からも、米・衣類・お漬物・カレンダーなどを頂きました。日本キリスト改革派教会中部中会(25教会)から託されている米など食糧費で、新米30kgを購入し、お届けしました。フードバンクかながわ様からは、米など食料品18ケース(約150kg)を頂きました。これらは、全て配り終わりました。皆様、ありがとうございました。

「コロナ」と「雪」に抗して 今回は、「コロナ」と「雪」に翻弄されました。コロナはある程度予測していましたが、雪については、少々甘く見ていました。福島県の浜通りと中通りでは、降雪・積雪などが違います。峠越えをする時に突然吹雪に遭うことも経験しました。平穏な関東平野にはないことです。原発避難者は会津地方にも多く逃れました。よく「(避難していた)会津は寒い。雪が深い」と伺いました。今更ながらですが、その通りだったと思います。

「コロナ」と「雪」は、被災者支援にとって逆風です。それでも、待っていてそして喜んでくださる被災者がいる限り、出かけていきたいと思います。独りよがりにならず、交通事故に気をつけて、など自戒しています。



あつまっぺ交流館

福島市内に浪江町役場がある。銀行店舗跡地。数名の職員が常駐し、住民登録などの業務も行っている。

ここでイベント開催予定だった。

浪江町民の避難者は、県内に 13,850 名、県外に 6,000 名 (2021.1.1). 浪江町内居住者は、1,329 人。町内の大半は、今も「帰還困難地域」である。



福島市内



福島市～相馬市の峠道

サマリタンハウスの塗装工事が始まりました。今はネットで囲われています。2月にはきれいになった姿を見ることができます。



「引き裂かれた家族」

上町団地は久しぶりの訪問でした。マジックのカイクさんたちと開場一時間くらい前からいつものように準備をしながら、窓口になって下さった方に「今日は何人くらいの方がいらっしゃるんでしょうね」と伺いました。「まったくわかりません」とのこと。つまり、チラシで案内をただけで、呼びかけたり、誘い合ったりはなされていない様子でした。それでも、コロナ感染急拡大の中、11 人が出席されました。浪江や飯舘の方々です。

イベントの終わり頃に実施したアンケートを全部読み終えて、驚きました。ほとんどの方が一人暮らし

だったのです。横浜の自宅周辺でも、独居の方は珍しくありません。割合だけで言えば、驚くことではないのかも知れません。しかし、いくらか今までの福島の農村の暮らし方(何世代も同居する大家族)を知らされている者として、思わずため息をつきました。「原発事故被害がなければ、こうはならなかった」、と皆さんは思っておられるはずです。「ときどきは子供たちに会いたい」などという文章を書かずに済んだはずだと。

子供たちの立場を想像すると、年老いた親たちのことを気がかりに思いながらも、避難先での生活に精一杯ということなのかも知れません。それはそれで、辛いことです。

原発事故で引き裂かれた家族の苦悩は、賠償金で贖うことはできません。(この項石川千鶴子)

【6】今後の予定

今回の第6波感染者数は、アメリカイギリスなど一部の国では減少傾向になっている。「早ければ2週間前後でピークが到来する可能性がある」(尾身茂会長 28日衆院予算委員会)、「東京都で第6波がピークに達するのは2月上旬」(政策研究大学院大学、土谷隆教授)など、2月上旬のピークアウトを予測する説も少なくない。この通りになることを願っているが、結末は誰にも分からない。

Café de FUKUSHIMA は、「終息を待って再開」でなく、「終息を前提に準備し、終息しなければ延期」で対応したい。これには関係者の同意と協力が前提になる。

2月21日～26日(2022年第2次)

* イベント開催は、2月20日までにまん延防止重点措置などが終わっていて、開催について関係者と合意があることが前提。今の段階でのこちらの希望は次の通り。

◇22日(火) 北原復興住宅(15) 浪江町民ほか 南相馬市 復興住宅集会所

◇24日(木) 萱浜地区住民(萱浜和み会)(7) 南相馬市民 原町区萱浜公会堂

◇25日(金) 大町災害公営住宅(11) 南相馬市民 南相馬市大町地域交流センター

イベントが開催できない状況が続いていたら、個別訪問(状況のヒアリング、次回開催計画など)と共に、物資の支援に充てたい。物資をお届けしたある社協の方が、「『社協に行けば助けてもらえる』と住民が言ってくれるようにしたい」と語っておられた。社協に食料を取りに来る人もおられるとのこと、被災地支援として、こういうお手伝いもしたい。